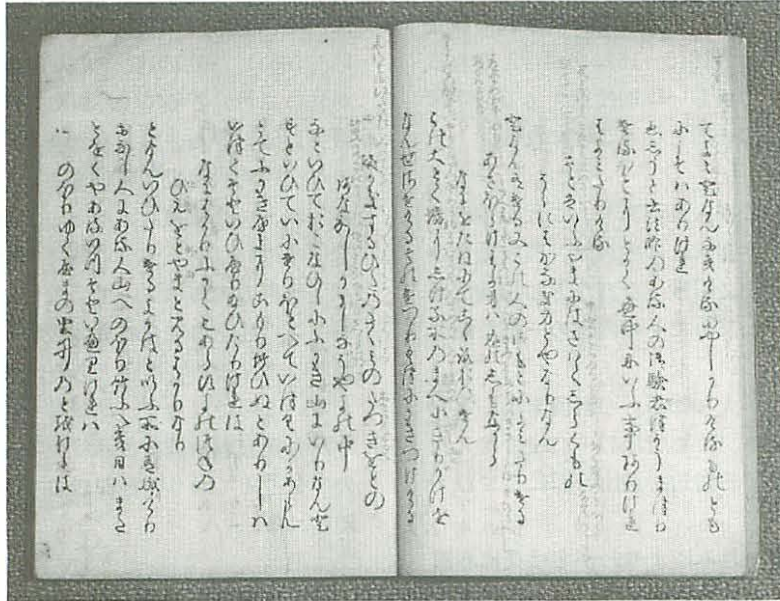


館蔵資料紹介

古活字版『大和物語』

森 下 純 昭



(本文)

てよりとなんなきけるあやしかりけるものども
にこそはありけれ

あしうと云法師のある人の御験者つかうまつり
けるほどにとかく世中にいふ事ありけれ
はよみたりける

さとはいふやまにはさはくしらくもの
そらにはかなき身とやなりなん
となん有ける又この人の御もとによみたりける
あさはらけわか身は庭のしもなから

なにをたねにてこころおひけん
この大とく坊にしける所のまへにきりかけを
なんせさせけるそのけつりくつかきつけける
まかきするひたのたくみのたつきおとの

あなかしかましなそやよの中
なといひておこなひしにふかき山にいりなんと
すといひていにけりほとへていつくにかあらん
とてふかきやまにこもり給ひぬとありしは

いつくそといひやり給ひたりければ
なにはかりふかくもあらずよのつねの
ひえをとやまと見るはかりなり

となんいひたりけるよかはといふ所に有成けり
おなし人にある人山へのほり給ふへき日はまた
とをくやあるいつそといへりければ

のほりゆくやまの雲井のとをければ

今回紹介する本学図書館所蔵の『大和物語』は、日本の書物史・印刷史において初めて活字印刷が導入され、多くの古典が一斉に刊行され始めた江戸時代初期のものである。そして、この古活字版『大和物語』の上巻には多くの朱の書入れがあり、そのことが本書の特徴ともなっている。また、表紙の見返しには、「昭和15年11月2・3日廣島文理大學ニ於ケル日本文化貴重図書展覧會ニ依頼ニヨリ出品『元和中活字本』トシテ陳列セラル（上

下2冊）」との貼紙があり、本書の来歴の一端を窺わせる。

さて、ここにいう「古活字版」とは、日本の印刷史のなかで、文禄（1592～）から江戸時代初期の寛永（～1644）にかけて盛んに行われた活字による印刷様式をさす。これ以前の奈良時代から桃山時代までの日本の印刷は、版木に絵や文字を彫り込んだ整版で、専ら寺院を中心に

小部数の発行であった。中世末になると、キリシタン文化とともに西洋の印刷技術が渡来し、一方朝鮮からも新しい活字による印刷技術がもたらされ、その結果漢籍・仏典のほか、それまでは書写本で伝承されてきた『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』などを始めとして、古典の類が盛んに刊行されることになった。『大和物語』もこれでようやく広く一般読者に読まれる機会を得たのである。元和年中（1615～1624）刊行とされる本学図書館所蔵本は、その新しい印刷技術である活字印刷による古典流布第一期の一冊ということになる。

本書の上巻には相当量の書入れがあり、これが本書の特徴となっているのだが、書入れの内容は、難解語句の解釈や人物についての説明、引歌・引詩などの指摘である。ここでは写真に掲げた部分でその内容の一部を紹介することとしたい。

写真掲出部分は、現行『大和物語』の41段末尾から44段の途中までの内容である。ここでは42・43段の書入れ内容を、その注釈対象とする語句を見出し語にして以下列記する。

〈さとはいふ〉の歌—きみによりわが名は花に春霞
 のにも山にもたちみちにけり
 中空にたちたる雲のほどもな
 く身のはかなくなりけるかな
 この二首の哥引合て見侍べき
 にや

〈あさぼらけ〉の歌—庭の霜を下々の身といふ心に
 そへたるにや ころおひけん
 とはきみを戀草のきざしたる事
 なるべし 朝露に寄て云遣しける

〈きりかけ〉—きりかけ夕顔の巻にきりかけだつ物
 とあり 板をめんとりばにしてふち
 をして牆のようにせし物也



これらは引歌や語釈などの注釈が主であるが、実はこれらのほとんど総てが北村季吟の『大和物語（拾穂）抄』の記述内容に酷似している。

『大和物語』の注釈書は、中世的学問の特徴をもった『（大和物語）鈔』（著者不明）が最古のものであるが、江戸時代初期には北村季吟の『大和物語（拾穂）抄』（承応二1653）、和田以悦『大和物語頭書』（明暦三1657）等が刊行され、さらに『大和物語直解』（賀茂真淵講義 宝暦十1760）等と、これらを参考にしあるいは祖述するものが江戸時代後期に数種ある。これら諸注の内容と上記書入れとを比較検討すると、上記の書入れ内容は順序に若干の違いはあるものの総てを季吟の『抄』に拠っており、他書の内容は入っていない。本書全体を通覧しても所々この注記者独自の異本校合・語釈等が見えるが、概ね季吟の『抄』の祖述である。但し、『抄』の総てを転記しているのではなく、語釈等を除いた注釈部分が主で、それも適宜取捨選択されている。なかでも引歌の指摘が大半を占めており、注記者の「引用」への関心のほどが知られる。

『大和物語』の内容は、10世紀ごろを生きた人々についての歌語りや古来の歌説話で構成されている。その中には現在に伝承される猿沢の池の采女の入水悲劇や森鷗外の小説に採り入れられる生田川伝説、また深沢七郎『楢山節考』に呼応する姥捨山伝説など、多様な内容を盛り込んでいる。その作者や成立は他の古典同様不祥であるが、歌語りとしてかなり読まれていたらしく、平安時代から中世にかけて歌学書などに種々引用され、その本文は鎌倉初期の歌人・古典学者藤原定家やその子為家・為氏等の書写本によって現代に伝えられている。そして本格的に研究の対象として取り上げられるようになるのは、『伊勢物語』『源氏物語』など特例を除いて、多くの古典作品がそうであるように江戸時代になってからである。北村季吟の『大和物語（拾穂）抄』がその端緒であるが、本書の書入れは、それをもとにしての読解の具体的事例である。

本書の資料的価値は、江戸時代最初期の出版物としての価値もさることながら、多量の書込みが『大和物語』の注釈史あるいは享受史を探る上での貴重な具体的資料ということにある。さらには、今後何等かの資料で、注記者や注の書入れ時期が判明すれば幸いであるが。

（もりした すみあき：教養部教授）